

Title	ハッカソンによるイノベーター発掘の試み : JPHACKSの活動
Author(s)	木戸, 冬子
Citation	年次学術大会講演要旨集, 31: 119-120
Issue Date	2016-11-05
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/13912
Rights	本著作物は研究・イノベーション学会の許可のもとに 掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Research Policy and Innovation Management.
Description	一般講演要旨

1 E 0 1

ハッカソンによるイノベーター発掘の試み~JPHACKS の活動~

○木戸冬子（東京大学大学院経済学研究科）

1. JPHACKS とは

JPHACKS は、2014 より開催している満 18 歳以上の学生を対象としたハッカソンで、今年度は 3 回目の開催となる。筆者は初回か 3 回目の JPHACKS2016 まで一貫して幹事として、運営を担っている。

JPHACKS2014 は、東京大学を会場とし、120 名の参加を得てハッカソン（12/13-14）を実施し、ファイナル（12/20）では、選抜された 7 チームがプレゼンテーションを行い、1 チームにグランプリを授与した。JPHACKS2015 では、東京大学、北海道大学、東北大学、神戸市、熊本大学の全国 5 拠点で 61 チーム、239 名の学生の参加を得てハッカソン（11/28-29）を開催し、ファイナル（12/12）は、東京大学を会場とし、選抜された 15 チームがプレゼンテーションを行い、以下の 3 つの部門賞と審査員特別賞を授与した。

World Challenge 部門：世界に向けて発信出来るプロダクト

Academic 部門：研究開発分野のテクノロジーから創出するプロダクト

Civic Tech 部門：ICT を活用して社会課題の発見・解決するプロダクト

JPHACKS2016 では、部門を廃止し、”未来を担うイノベーターを発掘する”をテーマに、国立情報学研究所、北海道大学、東京大学、名城大学、神戸市、福岡県の全国 6 拠点で 300 名の学生の参加を得てハッカソン（10/29-30、11/5-6）を開催し、ファイナル（11/9）は 15 チームがプレゼンテーションを行う予定である。

2. 大学ハッカソン

海外における大学でのハッカソンの事例としては、Stanford University d.school[1]、MIT [2]、University of Pennsylvania[3]などがある。また、我が国においては、2013 年 6 月に東京工科大学と日本ベンチャーキャピタル株式会社が産学連携で大学ハッカソン[4]を、2014 年 4 月にお茶の水女子大学とマイクロソフトとの連携による国際女性ハッカソン大会コンテストの日本大会 International Women's Hackathon 2014, Japan [5]を開催している。大学または大学教員等で構成される委員会等が主催するハッカソンとしては、2014 から始まった東京大学の Tea Time Hackathon (TTH) [6]と JPHACKS[7]がある。また、今年度から東京大学新聞の学生が主催する東大ガールズハッカソン[8]の開催が確定するなど、大学におけるハッカソンの取り組みは多くなってきている。

3. JPHACKS における産学連携

大学におけるハッカソンの課題の 1 つとして、成果の実世界への反映がある。アイデアを育て、ハッカソンでの成果を活用するには、「運用主体」や「資金」の確保が課題である。JPHACKS では、これらを解決する手段として、企業スポンサーの誘致を積極的に進めている。JPHACKS の運営は企業スポンサーの協賛金により運営費用の提供以外に、企業スポンサーには、学生の知的財産権を守ったうえで、成果を実社会に反映するための出口の提供についても期待をしている。今年度からは、企業と学生の連携を促進するために、ファイナルにて選抜された 15 チーム毎にブースを設け、スポンサー企業が各ブースで直接学生と話ができる仕組みを取り入れることにしている。

4. JPHACKS の評価

JPHACKS では、2015 から以下の 3 つの共通審査基準を設け、特に技術的な側面の評価の比重を置くことを特徴としている。

(1) 技術

ハッカソン内で完成度の高い成果物を開発できているかという視点だけではなく、ハードウェア・ソフトウェア開発内容における技術な観点から、優れた成果物につながっているかどうかを総合的に判断する。

① 完成度

ハッカソン時間内で作られているか

正しく動作をしているか

② 技術活用性

必要な外部技術を正しく選択できているか

外部の技術を正しく活用できているか

データ活用：オープンデータ，API

技術活用：API，ライブラリ，フレームワーク，外部サービス

デバイス活用：モバイルデバイス，ハードウェア等

③ 技術的独自性

これまでにない新しい技術か

再開発を行っていないか

既存の技術に対する付加価値となっているか

(2) デザイン

実際に利用者が活用することを想定した上で、適切なデザインができているかどうかを評価する。

① UI デザイン

利用者がストレスなく利用できるインターフェイスとなっているか

使いやすさの工夫がされているか

② UX デザイン

利用者が予期している体験をすることが出来るか

利用者が得られる満足度が高いと判断できるか

(3) 着想 Idea

成果物が世の中に広く受け入れられ、発展の可能性をもっているのかを企画視点で評価する。

① 新規性・独自性

これまでにはない斬新さを持っているか

これまでのやり方をより利便化するものとなっているか

② 親和性

ターゲットが明確になっているか

課題が明確であり、課題を解決できるものとなっているか

手段として最適な手法を選択できているか

③ 展望性

様々な分野や業界に応用や展開をしていくことが予測できるか

利用者が高い頻度で活用するものとなる可能性があるか

ユーザーがお金を払ってでも利用する価値となる可能性があるか

5. むすび

JPHACKS では、毎年終了後に、学生および企業スポンサーからのフィードバックを得て、翌年の JPHACKS の審査等に反映しているが、まだ、計量評価に至っていない。参加学生の大多数が納得できる方法論の確立については、今後の研究課題としたい。

謝辞

JPHACKS を実施するにあたり、ご協力を頂いた株式会社ギブリーの 新田章太氏、山根淳平氏、村上友章氏に深く感謝致します。

参考資料

[1] <http://dschool.stanford.edu/hackd/>

[2] <https://www.hackmit.org/>

[3] <http://2016f.pennapps.com/>

[4] <http://www.teu.ac.jp/press/2013.html?id=160>

[5] <https://atnd.org/events/49368>

[6] http://www.gcl.i.u-tokyo.ac.jp/events/tt_hackathon/

[7] <https://JPHACKS.com/>

[8] <http://www.todaishimbun.org/utokyo-girls-hackathon20160919/>